

第 17 回環境ボランティアリーダー海外研修レポート

南ゆかこ

① 訪問団体の活動やマネジメントなど、どの部分を日本のボランティアリーダーとして生かせるのか

どのようなポイントで生かすことができるのかいくつかの項目に分けて紹介したい。

1、ファウンドレイジング（資金調達）

まずファウンドレイジングとは、いかにお金を集めるかということである。どのように集めるかということで今後実践していきたいことを挙げていく。お金を集めるということは、納得してお金を出したいと思ってもらうことである。同じような洋服があり、1万円と千円のものであれば、多くの人は千円の洋服を買うのではないか。そこで一万円の洋服を買うことを選択するとしたら、それだけの価値と理由がある。またそこでは、知らない誰かにおすすめされるより、知っている友人におすすめされるということも関わってくると思う。ここにも信頼関係が必要である。つまり、自分の大切なお金を寄付したいと思ってもらえるということは、それだけの信頼と納得が必要である。その後は、寄付をしてよかったと心が動かせるようにしなければならない。これは、寄付を頂いたあとも、継続的にその人を喜ばせることによって、継続的に寄付を頂くことができるからである。この話を聞いたとき、納得してお金を払っているものは出したいと思うことがわかった。また、データベースファウンドレイジングとしては、このターゲットとなる人をしっかりとデータとして整理して、今後の資産の集めるときに、その情報を利用することである。

そして、寄付はお金だけではないということである。ボランティアで手伝ってくれる人たちの時間も大切な寄付である。寄付してくれることに対して、感謝することを忘れず、何らかのお返しをしていくことも大切である。

このことから、今後はどんな人が何を望んでいるのかということに、焦点を合わせて考えていけたらいいと思った。また、ドイツにも寄付を募って 2 億円を集め、自然を学ぶ施設を作ったエプラーさんという方がいた。このように、お金を集めるということは人を動かすということでもあると思った。

2、人材育成

ヘッセン州の 16～26 歳のすべての若者は、エフイーアウトという制度がある。

これは、義務教育終了した資格を有する若者が申し込むことができ、6カ月～18か月の期間で環境に関する場所で仕事を体験することができる。具体的には、農家、研究所、庭園局、都市計画、環境教育、広報などのさまざまな機関がある。1年中希望届を出すことができ、4月に受け入れ先を決めるための集まりがあり、受け入れ先を決める。始まりは8月が9月であり、12か月申し込む人が多い。実際の受け入れ先での活動以外に、年に5回のセミナーに参加しなければならない。将来自分の活動したい職業の方向性を見極めることができ、将来の進路を決めるにおいて重要な役割をしている。また、受け入れ先としても安いお金で若い人材を確保することができ、非常にお互いにとって良いものになっている。現在、大学生の中にはこのようなボランティア活動に関わりたいと思っている人もたくさんいる。このような人を助けるような制度作りをできたらいいと思った。

また、同様に感じたことは、森のようちえんも立派な人材育成であると思った。小さいころから自然と触れ合うことによって、自然を大切にすることを学ぶ。先生たちは子供が泣きついても自分でどうしていったらいいか考えて行動するようにさせていたりする。(ちゃんと自分のことは自分でできるようにさせている。) 私がとても驚いたのは、子供を抱っこする先生がいなかったことである。日本であれば、こけてしまったら自分で起き上がることなく、誰かの助けを求める。しかし、こけてもまた立ちあがり走り回っていた。逆にこっちがひやひやすするくらいだ。このように、目的を明確にしている指導によって子供たちが育っている。環境教育、特に小さいときに行われる教育はとても影響があると思った。小さいことから自然に触れる機会を作っていけるようなことがしたいと思った。

3、広報

NABU の広報を行っているミハエルスキーさんにお話を聞いたが、広報はやはりどんなところにニーズがあるかを見極め、アピールしていくことが大切である。ここで取り入れたいと思ったことは、年に一度、年間のスケジュールのパンフレットを発行していた。ここでは、そのプログラムの内容、時間、参加費などがすべてのせてある。ここまで具体的にすることによって、わかりやすくより参加しやすくさせている。また、プログラムが多様で短いものもあるということもポイントであると思う。もしプログラムが2時間だけのものとしたら、ちょっとだけ参加してもいいと思うだろう。いきなり、会員であったり、長いプログラムであったりすると、難しいかもしれない。

日本 NPO において、さまざまな NPO があり、活動も色々ある。これらの

NPO がどのように活動しているが、詳しく知らない人も多いのだと思う。知らないからで済まされてしまうのは、もったいない。興味をもってもらえる人を増やしていきたい。

4、選択

ドイツにきて、さまざまな人の話を聞いて感じたことであるが、どの人も選択しているということである。エフイーオットのシステムに関してもそのまま大学などに行くこともできれば、1年間このような研修制度を利用して環境や他の分野について学ぶことができる。森のようちえんに通うこともできれば、普通のようちえんやまた特別な別のようちえんに通うこともできる。ベジタリアンになることもできれば、ならないこともできる。このように、ドイツには選択肢が存在し、選択をすることができる。このようなことも生きていくうえではとても重要なことであると感じており、選ぶということはその選択に責任を持つことである。その選択肢を増やすことができるようになりたい。それは、NPO が選択肢を作れることであり、市民が選択を求めることであると思う。

5、生活

個人的には、無理をせずに取り組むという姿勢に大きな気づきがあった。これは、これまで環境を守るための活動として、さまざまなことに対してもっと厳しく真面目に取り組まなければならない、もっと大きなことを変えなければならないと思っていた。しかし、今回どこの団体や施設を訪問させて頂いても、自然保護！環境活動！というがつつした様子は全くなく、いいと思っているからやっているのであるという気持ちでできることから行っていると実感した。いいからみんな同じように取りくまなければならない！という日本ではなく、いいからやっついこうというように気軽に取り組むことができる。

例としては、ドイツの環境保護連盟の BUND という団体の会員の方の地域活動を紹介してもらったときがある。このとき、彼は地域のコミュニティーガーデンについて話を聞かせてくれた。住宅街の一角にある場所を 2 年前からコミュニティーガーデンにし、週に 2 回、集まりながら野菜やお花を育てている。このとき、マインツの町や BUND が協力していることはもちろんだが、市民が無理なく活動を行っているということである。彼は、IT 関係の仕事をしており、普段は環境に大きく関わっている人でない。しかし、自然が好きでいいなと思ったことに、無理なく取り組んでいるところ、また無理なく取り組めるような環境があることに驚いた。他にも実際に環境に関わるさまざまな人と話をした

が、みんな好きで楽しくやっているという気持ちが伝わってきた。また、制度に関しても無理なく行動ができるようになっていく。

ドイツではペットボトルの空をスーパーなどに持っていくといくらかお金が返ってくる。これは、ペットボトルにデポジットが含まれており、市民がちゃんとごみとして捨てないようにするシステムを作っている。これなら、環境にあまり関心がない人でもペットボトルをリサイクルすることができる。

② 研修を通して日本の環境ボランティアリーダーを支援するために、どのような仕組みが考えられるか

今までにボランティアリーダーとしてドイツに行った人が集っているために、同じようにドイツの制度をみているので、多くのことを共有することができる。仕組みとしては、その回ごとのつながりは強いと思うが、縦のつながり全体のつながりが必要であると思った。同じ県から過去に研修に参加している環境ボランティアリーダーの人もある。今後も第17回のボランティアリーダーのつながり、同じ県でのつながりを大切に、また協力し合いながら活動を行っていききたい。

また、メディアの力も使っていきたいと思った。報道がどのようにとらえられるかではなく、取り上げてもらうだけでよいということを BUND の方が話していたが、取り上げてもらうだけでよいので、メディアなどにこの環境ボランティアリーダー会の存在を知ってもらうことができたらいと思った。第17回の研修生とも話題になったが、本などを発行するというのもいいと思った。ドイツでせっかく学んだことを多くの人に発信できることと知ってもらうということが大きなステップになると思った。

私は、今後、このような NPO と若い人をつなげるようなこともしていけたらいいなと思った。若いときに自然に触れ合うような経験を持つことは、今後の人生を選択していくにあたって大きな幅を広げることになると思う。今は、まだ上手くまとめられないが、若くてエネルギーを持っている学生にこのような活動を知ってもらうということにもつながればよかった。

③ 全体を通しての感想

実は今回の研修に参加するにあたって私はとても行き詰まりを感じていた。どのように活動を行っていくかということは、もちろんだがどれもじっくりすることがなく、今後の展開をどうしていけばいいのか、どうアプローチしていけばいいのかということに悩んでいた。しかし、今回の研修によってその答えが少しずつ見えてきたように思う。どうしたらいいかということのを頭で考える

のではなく、試験的に一度試してみたり、よくなければその時に軌道修正していけばいいのだと思った。

加えて、私が再確認したことは自然の大切さである。現代が今までに比べてどんなに便利になったとしても、私たちは自然の中で生かされていることを忘れてはならないと思った。近いところでいえば、私たちは明日の天気を決めることすらできない。今回のドイツで思ったことは、自然と触れ合いに共生していくかということであると思った。そのために、子供のころに自然と触れ合う経験をするには、今後の世界感を決めるにあたって大きな役割を果たすのだと思った。どうにもならない自然を受け入れるという心の広さも必要である。自然は、また私たちに感動を与えるとも思う。それは、どこまでも広がる空を見るとき、満天の星空、青く澄んだ水、赤と紫がまざりあった夕焼け、涼しい秋のはじまりの紅葉、そして、道端に生えている一輪の花。誰にも、心を動かされた経験があるのではないだろうか。この美しい自然を残していきたい。

私は、小さいころセブン-イレブンにおいてあった緑の募金箱にお釣りを入れていた。子供ながらに今でも覚えている。その緑の募金箱が十数年後にこうして私とつながり、大きな力になってくれたことに感謝の気持ちでいっぱいです。小さな子供からおじいちゃんおばあちゃんまで、募金してくれたみなさまに心より感謝しています。この経験を活かして、日本の環境社会に必ず貢献していきたいと思います。

以上